キマイラ／*Chimera*
(1973)／ジョン・バース
(國重純二訳)／新潮社
(5/15刊・¥1,600)

現代文学を語るとき、すぐに問題になるのは、その構造と手法である。何しろ目立つのだから、しようがない。本書でも、対数螺旋の構造を持つ「ペルセウス物語」や、作者（らしき人物）が登場する「ドニヤーザード姫物語」（シェヘラザードの妹）など、ともかく、手法を第一の話題にしなければならない作品は多い。しかし、そこにばかり目をやっていては、物語を読む邪魔になるだけだろう。

シェヘラザードの千夜一夜物語の真相。メデューサの首を取った英雄ペルセウスの、その後の物語（妻アンドロメダと不仲になり、遂には再生したメデューサと恋に落ち……）。そして、三分の二を占める「ベレロフォン物語」は、怪物キマイラを退治したベレロフォンが、あまりに幸福な生活に疑問を感じ、真の英雄たるにふさわしい、悲劇的な最後を飾ろうと旅に出る物語。

本書をSFとして紹介する理由は、やはり、その手法やパロディ的な作風にある。けれども、念のために言っておくと、どの作品も、評者には大変面白く読めた。決して難解と思えないし、こういうものも、読んでおくに越したことはないだろう。（俊）